

肢体不自由特別支援学校における認知面の実態把握について

—感覚と運動の高次化発達診断評価法の肢体不自由特別支援学校への応用—

○富田直

池畑美恵子

(埼玉県立越谷特別支援学校)

(淑徳大学発達臨床研究センター)

KEY WORDS: 肢体不自由 実態把握 認知

(目的) 肢体不自由特別支援学校においては、子どもたちが姿勢・運動面の障害を有していることから、自立活動においても身体の動きの内容を中心として取り組まれることが多い。しかしながら肢体不自由特別支援学校の子どもたちの多くは認知面や感覚面、情緒面、関係性、コミュニケーション手段といった様々な側面でのつまずきを有しており、姿勢・運動面に限定されない、幅広い観点からの実態把握を踏まえた指導が重要である。しかしながら本校においては特段のアセスメントツールが活用されているわけでもなければ、指導内容表が作成されているわけでもない。子どもの実態の把握及び指導内容の選択が各教員の個人的な判断に任せられている部分が大きく、教員ごとに子どもの実態の捉え方に差があるうえ、個々の教員の経験則に基づく指導内容の選択になりやすい。また、授業を通して何を学んだのかといった学びの履歴も残りにくく、12年間を通した学習の積み上げが困難な状況にある。そのため、埼玉県立越谷特別支援学校の教育環境を前提としたうえで、淑徳大学発達臨床研究センターにおける“感覚と運動の高次化発達診断評価法”を参考にしながら新たに子どもたちの認知面の実態把握を行うシートを開発することを研究の目的とした。

(方法) 本研究では、“感覚と運動の高次化発達診断評価法”を踏まえ、表1に示す越谷特別支援学校における教育課程の類型ごとに複数の認知課題を仮に設定した。その際には、越谷特別支援学校に既にある教材を活用することを前提とした。そのうえで各類型の教員及び子どもたちに事例研究を依頼していった。事例研究の際にはビデオ録画を行い、子どもの課題に対する取り組み方を分析していく中で、各教員の意見を取り入れながら項目の妥当性を検討した。事例研究を実施した人数は、教員が類型ごとに1名ずつの計4名、子どもが1～2名ずつの計7名である。

表1 越谷特別支援学校における教育課程の類型

<ul style="list-style-type: none"> ・類型Ⅳ：自立活動を主とする教育課程 ・類型ⅢB：知的障害特別支援学校代替の教育課程1 ・類型ⅢA：知的障害特別支援学校代替の教育課程2 ・類型ⅠⅡ：当該学年相当/下学年代替の教育課程

(結果) 研究の結果、各教育課程でおおよその認知発達を捉える際に取り組みやすい課題を全18項目設定し、“越谷自立活動実態把握シート”を作成した(表2)。また、すべての項目について、記録用紙に加えて“子どもたちの課題のできかた”“できなさの背景要因”を読み解いていくためのチェックシートとその解説を附し、2段階のシートとした。

表2 “越谷自立活動実態把握シート”項目

教育課程	国語(小/知的教科)	算数(小/知的教科)
類型Ⅳ	①積み木倒し(視覚)②キラキラぼし(聴覚)③くるくるチャイム(視覚)④さまざまな感触(触覚)	
類型ⅢB	③名詞・用途選択	①型はめ②代表性の弁別④形態構成

類型ⅢA	①絵の説明②単語、文の理解③しりとり④象徴模倣	⑤数量の取り出し
類型ⅠⅡ	①複数の要因のある絵の説明②文章読解⑤絵の順序とその説明	③足し算④積木構成

項目の妥当性を検証するにあたり、考慮したのは以下の2点である。

- 1・たとえば型はめにおける“弁別のステップ”など、実施することによって子どもの実態を記録することだけではなく、教員が子どもの見方を深められるようにすること
- 2・国語や算数の内容と関連付けることで、各類型間のつながりが見えるようにすること。また、自活主の教育課程についても、教科の内容につながる実態として、各種感覚の使い方を取り上げること

“越谷自立活動実態把握シート”を作成するにあたって協力をいただいた教員からは、

・“子どもの見方”とはよく聞くが、こうやってビデオを確認しながらあらためてチェックをつけていると、いかに自分が子どもの姿を“なんとなく”見ていたかがわかった。
 ・“できた、できない”ではなく、どのようにやっているか、どうしてできるのか、なぜできていないのか、が見えたと思う。

といった感想が挙げられた。

(考察) 子どもの実態把握をするため、適切な支援内容を決定するためのツールとしては、広島県立福山特別支援学校におけるものなど近年様々なものが開発されており、全国各地の肢体不自由特別支援学校で用いられている例も多い。“越谷自立活動実態把握シート”については“根拠のある指導”を目指し、“感覚と運動の高次化理論”を肢体不自由特別支援学校に応用するという観点から作成した。また、“越谷自立活動実態把握シート”ではチェックを2段階構成にし、“あくまで客観的な事実を記録するもの”と、“子どものつまずきをその背景要因から掘り下げていくためのもの”とに分けた。その中で上記のような教員の感想が挙げられたことを考察すると、子どもの認知面の実態を把握し、支援にいかすために作成した実態把握シートではあったが、一人一人の教員が子どもの発達の理解を深めるための研修教材としても効果的であったのではないだろうか。

今回は認知面を中心として実態把握シートを構成したが、実施した教員からは、「姿勢・運動面、摂食面、呼吸面といった内容の実態把握シートも作成できないだろうか」という声が聞かれた。今回のシートは完成形ではない。項目や解説の妥当性を検討していくことは言うまでもないが、認知面以外を取り上げていくことも、今後の課題としたい。

(文献) 宇佐川浩(2007):「障害児の発達臨床Ⅰ感覚と運動の高次化からみた子ども理解」.学苑社.

(TOMITA Tadashi, IKEHATA Mieko)